

古典文学の読みと考古学

丸尾 壽郎

大またに歩いているという。その歩行中に三度ばかり精神的動揺が見られるというのだが、なにかあったのだろうか。なんともリアルな鑑定ではないか。(岩波「古」)

こんな農民像が浮かんでくると、つくづく学問とか科学的研究とかの地道な研究努力に對して深甚な敬意のわくのを覚える。

最近の考古学の成果は、ほんとうに目ざましい。吉野ヶ里遺跡の発掘にしても平城宮跡

や長屋王邸跡から出土したおびたらしい木簡の解説にしても、そこに住み、暮らした人々の生活のようすが、まざまざと目に見えてくるようなところがあって興がつかない。遺跡の発掘にかかわる概要報告書などは、なにがでてくるか目が放せない。ことにそれが文献史料を裏づけたら、その読みかたを示唆したりするときには格別である。たとえば群馬県高崎市の日高遺跡からは、平安時代初期の水田跡に農民と馬の足跡が見つかっている。この水田はきわめて狭小で一枚が百平米ぐらいしかない。そんな狭い水田で馬を農耕に使っている。「田令」では口分田は条里制で区画され、一段(約十二)が基準とされている。それ

で男は二段、女はその三分の二(約半米)が支給されたことになっている。しかしその規模の水田形成の時期も実態も不明で、日高遺跡

などは段をこんなに細かく区分している。これは地理的に中央政庁の直接管轄から遠く離れ、地形的には浅間山を望む谷間の平坦地であるという条件も加わるであろうが、水田耕作に「田令」が定めた牛でなく馬を使っていることも合わせて、史料や中央政庁近縁の地の実態だけを証拠に、史料の記事を全国的に普遍化はできないという一例だとされる。

おもしろいのは、この水田の足跡を調べた群馬県警本部鑑識課の足跡研究所の報告である。つとに有名でご存知だろうが、それによるとこの足跡は同一人で、身長一六一―一三センチ。やせ形の男で、水田の中を二十五歩、

国立文化財研究所の黒崎直氏が七世紀後半の便所を発見されたことが報道された(朝日新聞四三)。つづいて法華寺町の藤原麻呂の邸宅跡から木の樋が見つかった(朝日新聞九)。

これが日本最古の水洗トイレの遺構だということで、その研究成果を同研究所の主任研究官松井章氏(環境考古学)が六月二十一日に平城宮跡資料館(奈良市佐紀町)で講演発表された。その内容を同氏は同年七月二十三日の朝日新聞にわかりやすい詳細な稿を寄せて報告しておられる。

当時の貴族や農民がどんな食生活をして、たかは、いろいろと分明になってきているが、排泄物をどう処理したかは今日までよくわからなかった。『今昔物語』卷三十「平定文本院侍従ニ飯借スル語」第一に、樋洗女が「香染メノ薄物ニ管ヲ裏ミテ、赤キ色紙ニ繪

書キタル扇ヲ差シ隠シテ、局ヨリ出デテ行ク」とあることから、便器の筥に用を足して、排泄物を捨てると、あとは筥を洗滌して使ったという程度の理解である。しかしそれは禁中で、しかも女性の場合のことである。どこに捨てに行つたかよくわからないが、大内裏内郭の東北隅に御樋殿（虎ひどの）といつてトイレがあるから、そこだろうと思われる。『御堂閨白記』に「御樋殿昨日午ノ時顛倒ス」（長和二年六月三十日）という記事が見られて、頭中将（藤原公信）からの知らせとある。トイレの設置のことはこれでわかるが、それがどんな構造であつたか、貴族邸内のどのあたりに設置されたか、そういう詳細は今までトイレ跡が発掘されなかつたこともあつて、さっぱりわからなかつたのである。

『梶中納言物語』「花桜折る少将」の冒頭に「月にははかられて、夜深く起きにける」少将が婦宅の途次、あまりに美しく咲き匂う桜にひかれて、とある家を垣間見るが、その家の風情から、むかし馴染んだ女の家だという記憶がよみがえってくるという、みごとに描写がある。そのあと「築地の崩れより、白きものの、いたう咳きつゝ出づめり。」という文が続くが、ここの解釈が諸書なんと暖昧

で、白い小袖姿の者が咳をしながら、何しに出で行つたのか読み取られていない。夜明けにはまだ刻のある夜中に築地の崩れから小路に出たのは老翁で小用を足しに行つたと思うのだが類推の域を出ない。というのも、『落窪物語』からの連想である。巻一に蔵人少将が乳兄弟になる帯刀（たてわ）を供に、雨中、中納言邸に落窪姫を訪れることが語られていて、露頭（つゆづみ）の第三夜も豪雨に見舞われ、大傘をふりさして出かける。小路を横切る辻で行列に合

い、狭い小路の片側に身を寄せるようにして行くと、雑色どもが見とがめて、盗人だ捕えろとばかりに土下座をさせられ傘まで引き倒される。そこに少将が「尿のいと多かる上にかがまり」傘につきて尿の上に居たる。」という叙述がある。当時の路傍はいつもひどく汚れていたのである。すでに弘仁六年（八一五）二月九日に「まさに宮外に在る諸司諸家をして当路を掃清せしむべき事」という太政官符も出ているくらいだ（類聚三代格、巻）。だから老翁がそこちよっと小用を足したとしても不思議ではない。衆庶の常態でトイレがそこになかつたわけではない。

この太政官符は、「この頃、京中の諸司諸家、或いは垣を穿ちて水を引く。或いは水を

窪いで途を浸す。（中略）流水を家内に引くは責めず。唯、汚穢を牆外に露るを禁す。仍つて糞ごとに樋を置き水を通せ。（下略）」とあつて、洛中貴族邸のトイレの位置と構造上の欠陥をも示唆する内容であつたのだ。そのことが今回のトイレの発掘で明らかになつたのだが、木樋の暗渠を設けることと、それでも尿管が街路の側溝に溢れ滞留するのを罰則を設けて、自邸の路上の清掃をきびしく義務づけていたのであつた。

松井氏によれば、当時の貴族邸のトイレは、道路に面する築地塀の基部の一方に穴をあけて木樋を通し、道路の側溝から水を引いて、もう一方の築地塀の基部の穴から道路の側溝に流し出す暗渠構造をもつていたとされる。

取水口に杭を打って水を塞ぎ止め、暗渠で邸内に引き入れる。邸内には塀から馬蹄形に掘られた浅い溜めがあつて、そこに溜つた尿尿を水が流して暗渠の木樋を通つて邸外の側溝に流すという仕組みだ。こうしたトイレの基本構造は必然的に位置を築地塀際に固定化する。水洗式もよいが、平安京はどこも異臭が漂つていたのではないか。香をたく必要があつたわけだが考古学の学際的成果の援用で、古典の読みが急に豊かなものになつてきた。